まちの幸福論
～自分たちのまちをデザインしよう～

株式会社studio-L代表　山崎　亮

2005年から、自分の仕事をコミュニティデザインと名のり、studio-Lという事務所をつくりました。コミュニティの方々と一緒にまちづくりや、公共施設をデザインする仕事です。基本的には仕事の９割ぐらいを役所の方々と一緒に進めています。呼んでいただければ、25人ぐらいのスタッフと一緒に、いろんなまちに行って、住民参加のまちづくりのお手伝いをしています。僕らは、住民の方々が話し合って、住民の方々が行動を起こす際に支援をするのが役割です。

計画をつくるときも住民の方々と一緒に話をしていく形で進めています。実際のところ、「利用者の意見が反映された計画ができました」というだけではおさまりません。意見を出してくれた皆さんが、つながりができて、一緒に何かやりたい、という気持ちになってくれて、まちづくりの活動を起こしてくれるのです。

智頭町のプロジェクト　まずは自宅や職場に伺う

人口が少ない自治体の、一つの取り組みからご紹介しようと思います。鳥取県に智頭町という町があります。智頭町の人口は約7,000人です。そこから総合計画をつくってほしいとの依頼がありました。町長の理解もありまして、住民参加がいいのではないかということで、住民参加型の総合計画をつくることになりました。

現地を訪れ、ワークショップをやりますというような案内を出す前に、地域の方々の話をまず聞くことから始めます。ご自宅か、職場に伺い話を聞かせていただきます。会議室に集まってくださいと言うと、緊張する方が多いのです。それで初めはご自宅、あるいは職場にお伺いします。

どういう基準で相手を決めるかですが、僕らに仕事を頼んでくれた担当者の独断と偏見でいいと言っています。あなたがこの地域で、あの人は面白い活動をしているなあと思う人を10人紹介してくださいと。その10人に、僕がアポイントメントをとって話を聞きに行きます。

どんな活動をしているか。今、その活動で困っていることはないか。このまちの未来について考えるワークショップという話し合いをやるのですが、来てくれませんかという話をします。最後の質問はいつも決まっています。「あなたがこのまちで、あいつは面白いことをやっていると思う人を３人紹介してください」と言います。地域で100人ぐらいの話を聞くと、大体この地域は何が問題になっていて、どこが特殊で、どこが特徴的な売りとなる場所であるかが分かり、地域の人脈図が見えてきます。

何より大切なことは　住民が自ら学び市民になること

皆さん、まちを自分なりにちょっとはよくしたくて参加している。そのことは信じましょう、というところからワークショップは始まります。もう一つ、要望陳情型の意見は受け付けませんとい

山崎　亮（やまざき　りょう）

略歴

studio-L代表。関西学院大学建築学部教授。コミュニティデザイナー。社会福祉士。1973年愛知県生まれ。大阪府立大学大学院および東京大学大学院修了。博士（工学）。建築・ランドスケープ設計事務所を経て、2005年にstudio-Lを設立。地域の課題を地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクトが多い。

主な著書

『コミュニティデザインの源流（太田出版）』、『縮充する日本（PHP新書）』、『地域ごはん日記（パイインターナショナル）』、『ケアするまちのデザイン（医学書院）』などがある。

著書一覧　https://note.com/yamazakiryo/n/n5e1ea1f4979e

YouTubeチャンネル　https://youtube.com/c/山崎亮99

うことです。提案型の意見がほしいことを、最初に皆さんにはお伝えしています。

また、「稼ぎ、遊び、そして休み。この３つだけで生活を回していて大丈夫ですか。務めってありますけど、皆さんは務め、まちのためのことをやる時間を確保していますか」という話をすることもあります。稼いで税金を納めるのだから、務めの部分は全部役所がやってくださいという意見もありますけど、「務めの部分を地域の仲間と一緒にやって面白くなったら、人生がめちゃくちゃ楽しくないですか、遊びのために余計なお金を使わなくてもよくなりませんか」というお話をする場合もあります。そのとおりだなと腑に落ちていただいてから、意見を出していただいたり、活動を起こしていただいたりします。

３年ぐらいワークショップをやっている間に、組織ができて、チームができて、まちづくり活動をいろいろと始めてくれることが多いのです。

住民参加において重要なのは、住民が学ぶことです。時代を読む力、住民にはいったい何を果たす義務があって、どう学んでいくのか。しかも学び合うことは、こんなに面白いことなのか。新しいことを知って、新しい活動をしたら、こんなに生き生きとしてくる。そういうことを実感してもらう場でもあります。

もう一つ、意見を出すからにはかなり考えて調べなければいけません。この、考えたり調べたりすることが、志を持った市民になっていくプロセスなのだと思います。

総合計画をつくるときも、産業振興ビジョンをつくるときも、できれば住民参加にするといいのではないでしょうか。これを10年間続けたら、住民の方々から皆さんに届く意見が、ひょっとしたら、皆さんのほうが勉強しなくてはいけないと思うぐらい、高いレベルになっている可能性があります。

さて、智頭町の場合、100人ぐらい集まってくれました。100人の方々に集まっていただいて、まずは講演会のようなことをやりました。そのときに、ワークショップはこれから１年間続くので、月に１回ずつぐらいのペースですから、ぜひ来てくださいねと、呼びかけをしました。ただし公共的な話、総合計画の話ですから、一般に公募します。公募したうえで、100人には連絡します。100人中60～70人ぐらいは来てくれます。それから、チラシや広報を見て来てくれた方が大体50人ぐらい。合わせると100人から110人ぐらいの方々が会場に集まってくれました。

このときはちょっと特殊なやり方をしました。それは、これまでの10年間に、役所はどんなことに取り組んできたの？という、300の事業を棚卸しするところから始めました。

10年分の各課の事業と、それぞれについて達成度合いとメモをＡ４の紙に書いてもらったもの、これらを一部屋に集めまして、並べます。そして役所の方100人ぐらいで手分けをして、大体何歳ぐら

いの人たちを対象とした事業だったのか、年齢別に組み替えます。10歳、20歳、30歳というふうに床にメモリを切って、そこにペーパーを並べ替えていく。これをまとめた横に長いレシートみたいな紙を出力して、ワークショップの会場の真ん中に持っていき、みなで見ます。

見る前にやることがあります。参加者の方々の前にも何歳代という目盛りだけが入っている同じような紙を置いておきます。そして自分の年齢のところに、縦に線を引いてもらいます。自分の年齢より左側は過去の自分に起きたこと、右側はこれから自分がどう生きていきたいのかを書くという、ワークのための紙です。この紙は縦にも３段に分かれています。一番上は自分個人に起きたこと・こう生きたいこと、真ん中は家族や友達に起きたこと・起きてほしいこと、そして、一番下は地域で起きたこと、そして地域がどうなってほしいかを書き込みます。

これを、同じテーブルになった人たち同士で見せ合うのです。全員みな友達だ！と言っていた人たちが、実は、あまり相手のことを知らなかったことに気づきます。それぞれの人生の背景と、これからどう生きていきたいのかという夢を知ったうえで相手の意見を聞くと、納得ができます。このようにワークショップを進めていって自己紹介をしました。

ある人は、55歳で早期退職して、起業したいと思っているけども、50代のところを見たら、50代のための起業支援というのがない。そういう支援を役所はやっておいたほうがいいのではないかと言えるようになります。

同時に、あなたたちも動き出してくれなきゃダメですよということで、この似たような問題意識をもっている人たち、動き出す時間が一致する人たち同士でチームをつくります。こういうことをして、総合計画をつくりました。

総合計画ができあがってスタートしたら、町民はまちづくりの活動を開始します。すると、そのまちづくりの活動が、ちょうど行政が位置づけて行う事業とリンクしています。だから、町民の活動を、役所も側方支援することができます。県や国から、適切な補助金やメニューが出てきているのであれば、動いている人たちがもう見えていますから、あの人のためになるという顔が思い浮かび、申請書を書くことができます。そして、我が町ではもう既に、こういうプロジェクトが動いているので、これを加速するためにこういう補助が欲しいのです、と申請することができます。

役所の職員が本気になることも、すごく大きいことです。住民が本気にさせます。必要なものがあれば、どんどん県庁や道庁に相談して取りにいく。そんなことができるような職員に育っていただきたいと思います。これが智頭町でやっていたことです。

草津市では公園をコミュニティデザイン 完成するとみなが集まる場に

次は人口が多く分かりやすいところを紹介しましょうか。滋賀県の草津市です。これはシンプルです。公園をデザインしてほしいと言われました。草津川が琵琶湖に注ぐまち、草津市は人口約13万人のまちです。琵琶湖に注ぐ草津川は天井川になってしまいました。今は干上がっています。川を付け替えたのです。ここを細長い公園にしたい、デザインしてくれないかということでした。

そこで、コミュニティデザインでいきましょうということで、地域の方々に集まっていただき、意見を出してもらいました。

コミュニティデザインの仕事は、皆さん懐かしいなと思われるかもしれませんが、ていねいに３密をつくる仕事でした。だからコロナ禍になったら、ほとんど、これはやってくれるなと言われました。ですのでこの２年間、僕らはオンラインでのワークショップをかなり開発することとなりました。

ですが当時は、親密な関係がつくれることは大

切でした。これだけの数の人たちが、模造紙や付箋に意見を出していく。それを、その場で即座にまとめていく。まとめた内容を次回までに見やすい形に変えていく。ぱっと分かるようにまとめて、前回こういう話でしたから、今回はこの話にしましょうとか。こちらのテーブルではこんな意見が出ましたけれども、その意見をまとめてみると、こういうことだったのですねと構造化して、関係性を明らかにしていく。その結果、こんなプロジェクトをやりたいと言う人たちがいました、といった要素を、設計図面の中に入れ込んでいきます。さらに、ここはこんな風景になりますよという絵を見せていきます。

それから、ヨガをやりたいと言う人がいた場合、ヨガって何メートル四方ぐらいで、どういう広場があったらできる？といったことを確認していかないといけません。まだ公園はできていませんが、現場に行って、ヨガだったら大体これぐらいのスペースかなとか、どこが雰囲気がいいと思うか？といったことを確認していただく。

工事が始まると予定地の中には入れません。まちの中の広場ですとか、空き地、駐車場を借りて、自分たちがやりたいと言ったプロジェクトをどう実現するのか試行錯誤を続けていきます。

このような住民参加のプロセスを経ているので、完成した公園ではこの人たちが、来園者に利用サービスを提供している。公園を訪れるとあちこちで「ようこそ」と言ってくれます。そこがすごく重要な点だと思います。彼・彼女らが、いろんな活動をしています。

初めて公園を訪れた人たちというのは、この人たちのことを業者さんか、役所の職員かと思うようで、「おい兄ちゃん、駐車場、どこにあるんや」などと言ってくるわけです。「あんた、業者とか市役所の人と違うんか」「いや、違います。市民です」と返して「あ、すみません」となるのです。この関係が大事だと思います。私たち、みなただの市民です。何ならあなたもこっち側に来ていいのですよという、そういう立場が対等であることを公園が標榜していくのは、民主主義を公園でまずは教えていることになると思います。

計画段階からみなで話し合って、学び合いの仲間をつくって活動の準備をする。こういうことをやっていくと、公園が完成してオープンした暁には、わっとその人たちが入ってきます。

公共施設の使い方は市民が参加してみなで決める

公園を広げた、公共施設が完成してオープンした。だけど取り扱い説明書というものがないですよね。だから、町民、市民の方々はその空間をどう使えばいいのかを読むことができない。公園は何だかつまらない場所になっています。ボール遊びでも、もっとやればいいんです。もっとちゃんと対話を繰り返そう、話し合おう。それによって決めていこう。決まったことを、また数年後に変えてもいいじゃないかと。最悪な事例だけは避けるように最低限のルールを決めておく。こういったことを話し合うのに、公園は向いています。

図書館もそうです。静かにしていなければいけないと思い込んでいる。図書館は走り回ってはダメだ、静かに本を読む場所だと。これを言い続けると、子供たちは、図書館からどんどん離れます。図書館の人たちは、「何でこんなに人が来ないのだろう」などと言っているわけですね。

静かに読みたい人が入る防音の部屋を用意しておけば、その人たちはそこに入って読めばいいわけです。だけど、その部屋の外側は、結構にぎやかなこと、音楽の演奏会などやっていてもいいと思いますよ。ただし、これもやっぱり市民が集うワークショップや協議会で話を決めていかなければ、なかなか難しいでしょう。

役所がやるべき仕事は何で、共同体がやるべき仕事は何なのか。そして、議会はその間に立ってどう調整していくのか。このことが、これからの世の中ではすごく大切になる気がします。特に人

口が減少して、それぞれの予算が少しずつ削られていくときに、市民が主体的に市政を担っていく、まちづくりに参加していく。こういったことが大切になってくるのではないかと思います。

安城市では新設図書館を起点にさまざまな市民活動がスタート

愛知県の安城市。人口約18万人の少し大きいまちです。児童文学作家・新美南吉のまちですけれども、図書館をつくることになった。今度は少しややこしいです。民間の資金とノウハウを活用する、公共サービスの提供を民間主導で行う、定借でつくる、民間の駐車場が入るといった複合施設になるわけです。

このケースでもやはり、まずは住民の参加。そして本当に話し合うばっかりといった感じですが、TALK AND TALKをやるから来てくださいねと。そこでは、まちの中を自分たちで歩いているかのように地図の上をなぞりながら「この辺どうなっていますか？」と聞いていきます。

「ああ、そこ、おいしいコロッケ屋あるよ」「そこ、危険な十字路だね」とか、みなで意見を出していくフィールドワークですね。地図上でフィールドワークをやってみました。そうすると、実際歩いてみたいという希望が出てくるので、歩きましょうということになりました。

まち歩きをしましょうと連れて行くと、見る気になってくれないのに、まち歩きはしませんと言って地図上でやると皆さん歩きたくなる。人間はとても面白い生き物だなと思います。そういう手順をしっかり組んでいくと、面白い意見をいろいろと出してくれます。図書館の中でやっていいこと、悪いことみたいな話し合いからスタートし、自分たちが図書館の中でやりたいと思っている活動が出てきたなら、実際、社会実験として実行してみました。こうした実験を繰り返す間に、「アンフォーレ」という名前が決まり、図書館がオープンしました。

図書館からスタートしてウォーキングするチーム、新美南吉をめぐる歴史ウォークをするチームなど、図書館を拠点にいろんなことをやっている人たちがいて、今までと違う雰囲気の図書館になっています。

野々市市では高齢化社会への準備を始めた

次は石川県野々市市の話をします。金沢市の隣で、金沢に通勤する人たちが結構多い人口５万人ぐらいのまちです。金沢に通勤できるということで、平均年齢が割合若いです。

野々市市のすばらしいところは、高齢化率17.4％のときから超長寿社会をイメージして準備しておかなくてはいけないと決断をしたことです。これは偉いなと思います。そう思って、ぜひお手伝いさせてください、ということにしました。

役所の方から地域包括ケアに資する活動を生み出したいと言われました。このとき、僕らに問題意識が一つありました。地域包括ケアのワークショップをやったらどうなるか。多分、高齢化について意識の高い系の人ばかりが集まる気がするのです。だから今回は、そういう人たちが来なさそうな集め方にしようと思いました。

どうしたのかというと、「野々市市の雑誌をつくりたいので、一緒にやりたい人は集まってください」と言いました。我々デザイナーは毎年、雑誌をいっぱいつくります。一般的には雑誌をつくったことがある市民は、あまりいません。そういう背景があります。

「スマートフォンで美しく、インスタ映えする写真の撮り方、加工の仕方を教えます。そして、編集・インタビューの方法を教えます。短くても人を感動させる文章の書き方を教えます」そういうことをチラシに書いて周知しました。

そうすると、雑誌づくりにちょっと興味があるし、写真の撮り方、インタビューの仕方、文章の書き方を教えてくれるのだったら、なおさら参加

したいという人たちが集まってくれました。

集まってくれた100人の方々から、どんな雑誌をつくるのかと聞かれました。地域包括ケアに資するインフォーマルな社会資源を取材する雑誌ですと答えたら、分からないと言われました。

議員の皆さんは、お分かりのことと思います。高齢社会になって、公式な社会資源と非公式な社会資源がある。高齢社会における公式な社会資源とは病院・特養・老健・デイサービスなどです。だけど、小さな活動をしているお母さんや、NPO法人がやっている高齢社会のためのお手伝いなどのインフォーマル、非公式な社会資源に関しては、そのような情報をまとめた雑誌はなかったのです。

インフォーマルな社会資源と向き合う

「インフォーマルな社会資源ばかりを集めた雑誌をつくろうと思っています」と言ったところ、みな「高齢社会は全然意識をしていなかった。それは大事なことなのですか」という反応でしたので「じゃあ取材に行きましょう」と、取材に行き、写真を撮り、文章を書いて『ののいち日和』という、「いつまでも普通に楽しい暮らし」がテーマの雑誌をつくりました。

この雑誌、一時期「何じゃこれ」と大いに話題になりました。市民の方々がそれぞれの視点で選んだ人たちを、取材しています。ですので、取材されている人たちが何をもってインフォーマルな社会資源なのかは、実際のところよく分からないのです。例えば、あるスナックのママです。

このスナック、朝オープンしてカウンターに常連さんのためのお弁当を用意しておいてくれるのです。常連のお父さん、高齢者は朝、お弁当をとりに来る。無料でお弁当をもらえる。お昼ご飯はどこで食べてもいい。ただし夕方になると、弁当箱を返しに来なきゃいけない。そこで飲む。ママさんは、そこで回収しているのです。翌日の朝もまたお弁当をつくって待っている。お父さんたちは、まんまとまたお弁当をとりに行ってしまうわけですね。

男性には、台所に立ったことがないなんていう人がいたりします。こういう方が仮に奥さんが先に亡くなった、あるいは施設に入られたら、介護保険を使ってデイサービスを利用する、または、配食サービスを頼むといったことになるでしょう。つまり保険や税金を使って食事をするのです。

このスナックのママの例では、介護保険は使っていないし、税金も使わずにお弁当を手に入れている。これは、インフォーマルな社会資源として残しておかなければいけないのではないかと言えませんか。実は、このママはもう既に高齢なのです。では、この事業承継をどうしたらいいのかという問題提起につながっていくわけです。

インフォーマルな社会資源ばかりを載せた雑誌をつくった結果、何が起きたのか。「私たちが社会資源になるべきだ」という意識が生まれます。ワークショップも１年目が終わる頃、私たちにもできるかもしれないと、参加者たちが言い始めました。

じゃあ皆さん、地域包括ケアに資する活動をそれぞれやってくださいということで、２年目は楽しく美しい人生をデザインするというワークショップに切り替えました。ワークショップを繰り返し、データを分析して、医療チーム・介護チーム・仕事チーム・健康チームなど８つのチームがこの編集部から生まれ、今も活動を続けています。

皆さんのまちの中で、市の中で、何か新しい事業が起きるとき、できるだけ住民参加にされてみてはどうでしょう。そうすれば、役所の担当者も育つし、住民も学び合います。

これを10年、20年続けますと、市民が主体的にいろいろな提案をしたり、活動を起こしてくれたりするようなまちになりますから、税金を使った事業の比率を少し下げていっても、楽しく豊かに暮らしていける。高齢になっても安心して暮らしていけるまちにちょっとずつ変わっていくのではないでしょうか。